彙　報（'68.7～'68.12）

○京都大学イラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査報告として，２点が新しく刊行された。水野清一編『Durmantepe & Lalma』，足利惇氏，田村実造，恵谷俊之『イランの歴史と言語』○梅棹忠夫，今西錦司編『アフリカ社会の研究』は10月刊行，なお　○『京都大学アフリカ類人猿学術調査報告』Ⅱ号も刊行された。そのほか会員の著書として新刊されたものに　○ 河出書房刊『世界の歴史』で，佐藤圭四郎：古代インド（10月刊），宮崎市定：大唐帝国(11月刊)，前島信次：イスラム世界（12月刊）があり，また　○『中公バックス』として，岩村忍：西域とイスラム（６月刊），宮崎市定：宋と元（７月刊），田村実造：最後の東洋的社会（９月刊）がある。翻訳では○加賀谷寛，内記良一，中岡三益，林武の４氏によるギブ『イスラム文明史』が11月刊行された。同じギブ『イスラム文明』も加賀谷寛訳で67年刊行されたことを付記しておく。

○大学紛争を反映してか，学界活動もとぼしく，わずかに11月７日，カイロ大学教授，モハンマド・アハマド・アニース博士が，京都大学において「封建制から資本主義へ―エジプトの近代化―」と題された講演があったにとどまる。　○ニュースの集まりわるく多くの欠陥のある彙報となったことをおわびしたい。

○大学紛争が東京から京都，大阪へのひろがりをみせるとともに，本会の活動にもさまざまの問題が起こってきて，１年にちかい刊行のおくれをみることになったのは，編者として，まことに申し訳ない次第である。会員諸兄姉にふかくおわび申しあげる。○刊行がおくれたのは，多くの研究者がそれぞれの研究機関の問題に忙殺されて，ほとんどが執筆の時間を失ったことによる。○しかし提起された大学の本質，学問，研究の本質についての問題は深刻であり，それは同時に本誌，本会にもそのまま関わってくる問題である。本会の存在の意味と機能について，わたしどもも深い反省と検討をこころみる必要があろう。（吉田）